

# 信友

信友会事務局

〒162-0845  
新宿区市谷本村町3-19  
千代田ビル101号室  
(防大同窓会本部内)信友会事務局  
電話 080-7494-0245  
メールアドレス  
shinyukai@tune.ocn.ne.jp

- 主 記 事
- 2面：システム通信団長  
陸幕通信電子課長
- 3面：補給統制本部通信電子部長  
システム通信・サイバー学校改編の概要
- 4面：陸上自衛隊通信電子等の現況  
第六十回総会・合同歓送迎会等
- 5面：会員だより

## 変革の先導者たるシステム通信科

信友会会長 河本 宏 章



信友会々員の皆様、そして全国の現役のシステム通信科(旧通信科)幹部の皆様におかれましては、益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。

皆様ご承知の通り、令和六年三月二十一日に、「通信学校」は「システム通信・サイバー学校」に改編され、「通信科」職種は「システム通信科」職種に変更されました。その細部は本誌に現役の皆さんから詳しい内容をご寄稿頂きましたので、是非ご確認下さい。

この学校の改編及び職種名称の変更と時期を同じくして、信友会は六十年を超えて存続することとなりました。これはひとえに歴代会長及び役員の皆様のご尽力、そして会員の皆様の「通信科職種として陸上自衛隊に在籍した幹部自衛官等のOBをもつて構成し、会員相互の親睦を図ることを目的」とした本会への深いご理解と温かいご支援・ご協力の賜物と心から御礼申し上げます。

遅くなりましたが、私は成田千春会長の後を受けて令和六年四月から会長を務めさせて頂いております河本と申します。私の通信科部隊での勤務は、幹部候補生として着任した「東部方面通信群 第一〇六通信運用大隊 有線信務中隊」と「第六通信大隊長」の二回のみであります。このような私が歴史と伝統のある信友会の会長に就任して良いのだろうかかと悩みましたが、通信科幹部としての職務から何年も離れていた者特有の「信友会」のありがたみを伝えるのも私の使命かなと感じ、会長を引き受けさせて頂きました。と申しますのも、約六年前に補給統制本部副本部長を最後に退官し、合同歓送迎会に参加させて頂いた際、大きな母体に包まれたような感覚と安心感、通信科職種の先輩や大変お世話になった皆様とまた交わるのでできる喜びをひしひしと感じた経験に拠るものであります。

## 変革、そして躍進

システム通信・サイバー学校長

陸将補 奈良岡 信 一



信友会の皆様には、当学校に対しまして常日頃から暖かい御支援・御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。通信学校は、令和六年三月二十一日付で、陸上自衛隊システム通信・サイバー学校と名称が変更になりました。

これまでの歴代通信学校長をはじめ、諸先輩方の築いてこられた多くの業績を引き継ぎ、陸自のシステム通信及びサイバー等に係る人材育成の中枢としての使命を十分に果たせるよう部下隊員とともに、誠心誠意努力して参る所存であります。

信友会の皆様には引き続き、御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

さて、令和四年十二月に策定された防衛力整備計画に記されている防衛省・自衛隊のサイバーセキュリティ態勢の強化の一つである陸上自衛隊システム通信・サイバー学校への改編が実施されました。

この学校改編は、新たな防衛力整備計画の初年度の重要な事業の一つとして、また防衛力強化の足掛かりとして、その果たすべき役割は重大であります。このため、職種及び学校は、これに適切に対応し得るよう「変革」が必要であり、新たな局面を迎えたものと認識しています。

通信科職種では旧特技の「信務、有線、搬送、無線」から新特技の「システム運営、ネットワーク、暗号電信」への特技変換が行われ、令和五年度末で終了したことにより、職種名を「システム通信科」に変更しました。また、通信学校では、人事管理において職域(分野)として管理している「サイバー」の人材育成のため、サイバー教育部を新編することになりました。

主にこれら二つの事由により、校名を「システム通信・サイバー学校」に変更することになりましたが、陸自が重視している領域横断作戦能力やスタンドオフ防衛能力等の強化に寄与するため、今後、職種及び学校として果

たすべき役割は、大きく二つあります。一つ目は、領域横断作戦の焦点であるサイバー作戦、電磁波作戦に必要な人材育成や運用態勢の確立、二つ目は、指揮統制機能強化における現行のシステム通信能力の充実強化であります。

この変革を契機として、これまでの戦闘支援職種としての意識を払拭し、第一線戦闘職種としての気概を持ち、一致団結してこの重要な責務を果たすことができるよう「躍進」していくことが重要です。

ここで、学校としての今後の取り組み等について紹介します。

まずはサイバーについて、改編前からシステム防護課程等において防衛省・自衛隊のサイバー要員を育成してきましたが、サイバー教育部を新編したことにより、養成数を更に増加するとともに、サイバー関連企業等との連携を更に強化して教育の質的向上を図り、防衛省・自衛隊のサイバー能力向上に寄与していきます。

次に電磁波について、NEWS等の新たな装備により、通信・レーダ妨害能力、電磁波の探知・識別能力等の電子戦能力強化に係る教育の質的向上に加え、自衛隊の使用する電磁波の利用に関して適切に管理・調整する機能の教育についても強化し、今後の新たな電磁波作戦に対応できる隊員の育成に寄与していきます。

最後にシステム通信について、システム通信に任ずる部隊等の役割は、作戦における指揮の命脈として迅速・確実な指揮統制を行い得る坑たん性ある情報通信基盤を構築することです。このため、サイバー領域や電磁波領域と連携し、NOC(ネットワーク機能)、SOC(セキュリティ機能)、周波数管理機能を三位一体となつて運用できるようSNMS(システム・ネットワーク・マネージメント・システム)等を活用した教育により有用な人材の育成に寄与していきます。

おわりに、今後の各種取組みを実効性あるものとするためには、システム通信に任ずる部隊等の弛まぬ努力と防衛関連企業との緊密な連携が必須であり、また、日進月歩の通信電子分野においては、次世代のシステム通信のあり方を継続して検討していくことが重要です。今後とも、信友会の皆様には、我々現職に対する御指導・御鞭撻を賜りますとともに、益々の御健勝と御多幸を祈念申し上げます。



## サイバー指揮幕僚能力の飛躍的進展

システム通信団長

陸将補 青木 圭



信友会会員の皆様におかれましては、平素よりシステム通信団に対するご理解、ご協力を賜り心より感謝申し上げます。

システム通信団は運用を

担う中核的な部隊として本年度も各種訓練に励んでいるところですが、今般、とりわけサイバー分野の指揮幕僚能力は目を見張るほど飛躍的に進展していると感じており、この場にて紹介させていただきます。

平成30年に発出された「30大綱」において新領域における作戦能力の強化が示されたことを潮目にして、それまでシステム防護として扱ってきたものが一躍主たる作戦領域として取り上げられ、サイバー分野として急速に態勢・体制の拡大が進められました。

我々が能力向上を図る上で最初のお手本としたのは、日常的にサイバー攻撃に晒されている民間企業やそこにサービスを提供しているセキュリティ企業の方々でした。彼らは相当な費用を投じ、人材を育成して情報資産を守り、運用の継続性を担保し続けている当該分野の先駆者であり、ベテランの経験者でありました。我々は今でも彼らから多くのスキルを学び、その能力向上を図っているところです。

一方で、彼らから学べないスキルがありました。それは、如何にサイバー作戦を行うかということです。インシデントを素早く探知して分析し、効率よく処置することは学べても、自衛隊あるいは陸上総隊の全般作戦に資するサイバー作戦を如何に行うのか、つまり、どう情勢分析をして各種見積を行い、計画を立案した上で刻々と変わる状況の中で全体の作戦と整合しつつ戦闘指導をしていくのかという要領は掴めていませんでした。

このため、従来の我々の努力は主としてインシデント対応に注力されていて、監視・対処チームとしての能力・技術は向上していきましたが、事態に対して受け身の姿勢であり、主導的とは言えませんでした。

そのような中、米軍及びNATOの教育課程を出て、米軍やNATO主催の各種サイバー演習の場において作戦幕僚等の経験がある隊員の貢献により、指揮幕僚活動の原型となる考え方が持ち込まれ、サイバー情勢分析要領の普及、業務フロー及びマニュアルの整備が始まりました。これにより作戦領域の捉え方や情勢分析の幅や深さ、それに基づく各種見積の要領、そして状況や作戦段階に応じた命令の内容や出し方などが具体化され、幕僚組織の活動内容や監視・対処チームとの連携要領などが明確になってきました。つまり、チームを指揮する指揮官・幕僚の職位機能が明確化され、状況判断を通じた意思決定を行える組織化が格段に進みました。

この際、最も印象的だったのは、陸上作戦とサイバー作戦における幕僚活動の時間感覚の違いでした。

陸上作戦においては敵部隊の集結や機動を捉えれば、ワープでもしない限りその企図や作戦目標の見積りが全く外れることは想定し難く、戦闘指導において計画段階での分析・見積の多くは活用できると思います。

一方、サイバー作戦においては、とあるサーバーに対する攻撃がうまくいかなければ別の攻撃手段を色々と試したり、別の目標に切り替えてそちらに注力したりすることは容易にできます。このため、探知した状況に機敏に反応して追加の分析・見積をし、状況判断に繋げて監視・対処チームに命令を出していかなければならず、何をどこまで分析・見積りするかを決め、人的・時間的リソースを配分しなければなりません。余計なことをしている時間は全くないのですが、我々に染み付いた幕僚魂が邪魔をしてドキュメントの修正に時間をかけてしまったりするのです。

こういった意識の切り替えも実施しつつ、多種多様なサイバー演習に参加し、監視・対処チームの演練もさることながら、米軍はもとよりNATO諸国軍等ともサイバーコミュニティを構築し、様々な示唆を得て、我々の指揮幕僚能力に磨きをかけてまいりました。彼らの反応を見ても、我々の実力が着実に高まっているのを感じますし、部隊としても自信をつけてきています。最近では海自・空自のサイバー関連部隊にも普及し、連携を深めているところです。

今後も陸上自衛隊のサイバー作戦運用における中核的な存在として、その発展・深化を推し進めるべく全力でリードしていく所存です。会員の皆様の引き続きのご支援・ご指導を賜れば幸甚です。

## 令和6年度以降の防衛力整備について

陸上幕僚監部装備計画部通信電子課長

一等陸佐 弥頭 陽子



信友会の皆様におかれましては、平素より陸幕通信電子課に対するご理解と絶えずのご支援を賜り心より御礼申し上げます。この度、寄稿の機会をいただきました

たので、令和6年度以降の防衛力整備に関しご紹介致します。

令和4年12月、我が国の安全保障政策の主要文書、所謂三文書が策定されました。国家安全保障戦略では、我が国自身の判断として、2027年度において『防衛力の抜本的強化』とそれを補完する取組みをあわせ、そのための予算水準が現在の国内総生産の2%に達するよう所要の処置を講じるとされ、6年度は水準が上昇した予算の執行を行う2年目を迎えています。

防衛力整備計画では、2027年度までに我が国への侵攻に対し、我が国が主たる責任をもって対処し、同盟国等の支援を受けつつ、これを阻止・排除できる防衛力を構築するため、防衛力の抜本的強化に資する、自衛隊の能力等に関する7つの主要事業として①スタンド・オフ防衛能力、②統合防空ミサイル防衛能力、③無人アセット防衛能力、④領域横断作戦能力、⑤指揮統制・情報関連機能、⑥機動展開能力・国民保護、⑦持続性・強靱性が示されました。

令和5年4月には防衛力抜本的強化実現推進本部が設置され、徹底した事業の進捗管理等が実施されており、通信電子課も一丸となって事業を推進中です。また、同年10月には、『我が国の防衛力そのもの』である防衛生産・技術基盤を強化し、防衛産業による装備品等の安定的な製造等を確保するため、「防衛省が調達する装備品等の開発及び生産のための基盤の強化に関する法律（防衛生産基盤強化法）」が施行されました。

防衛力の抜本的強化に資する7つの主要事業から通信電子課が関連する事業等を中心に述べます。③に関連し、情報収集・警戒監視・偵察・ターゲティング機能の強化

があり、6年度予算ではUAV（中域用）機能向上型の予算等が確保されています。機能向上型には合成開口レーダを搭載することで、夜間等視界不良時における目標の撮影が可能となります。④に関連しては、サイバー能力向上のためシステム・ネットワーク管理機能の事業があり、陸上自衛隊全システムの防護、監視、制御等を一元的に行うシステムの整備が推進されます。また、電磁波領域

における能力強化があります。電磁波領域は現在の戦闘様相における攻防の最前線であり、本領域における優勢の確保は喫緊の課題との認識の下、通信・レーダ妨害能力に係る事業として、対空電子戦装置の取得及び電磁波管理機能の強化等が推進されています。⑤に関連しては、スタンド・オフ防衛能力等各種能力を統合的に運用するために、リアルタイムに指揮統制を行う態勢の強化、併せて我が国周辺の軍事動向等を常時継続的に把握し、認知領域を含む情報戦等にも対応できるようAIの導入・拡大が推進されます。⑦に関連して、2027年度までに装備品の可動数を最大化及び部隊能力の維持向上を図るため、リードタイムを考慮した部品費と修理費が確保されており、我々も可動数向上のため全力を尽くしています。

最後に防衛生産基盤強化法について述べます。本法律では防衛生産・技術基盤の強化のため、指定装備品等を製造等する事業者は、装備品等の安定製造等の確保に資する取組（特定取組）に係る計画を提出でき、本計画が防衛大臣に認定された事業者に対し、防衛装備庁が予算の範囲内において必要な経費の措置を実施するとされています。特定取組はi供給網強靱化、ii製造工程効率化、iiiサイバーセキュリティ強化、iv事業継承等があり、計画の策定にあたり、中小企業様向け相談窓口（君シカオランサポートデスク）が設置され、巡回サポートも実施されています。

防衛力の抜本的強化を実現するためには、防衛省・自衛隊自らの努力のみではなく、皆様のご協力が不可欠であり、これまで以上に連携を図り防衛力の抜本的強化のために一層の努力をする所存です。

信友会の皆様には、変わらぬご協力とご指導を賜りますようお願い申し上げますとともに、信友会の益々のご発展を祈念致しまして結びの言葉と致します。



## システム通信の補給整備における 現状と展望

補給統制本部 通信電子部長

一等陸佐 鷲谷和久



信友会の皆様におかれましては、平素より補給統制本部通信電子部の業務遂行に多大なるご支援、ご協力を賜りまして、心より感謝申し上げます。

令和五年末に第十三代通信電子部長として着任し早一年が経過いたしました。陸上自衛隊の兵站中枢に勤務する誇りを胸に、歴代諸先輩が脈々と築き上げてこられた伝統を継承しつつ、部隊の任務達成に寄与しうる補給整備業務を目指し、日々勤務しております。

さて、機関紙刊行にあたり「陸自のシステム通信・サイバーの現状と展望」をテーマとされることでしたので、通信科兵站支援を担う立場から、システム通信の補給整備における現状と展望について私見を述べさせていただきます。

令和四年末に安保三文書が策定され、防衛力を抜本的に強化することが明記されました。それに伴い、令和五年度以降、防衛予算が大幅に増大され、装備品などの維持整備費も省全体として倍近く増額されました。

通信科兵站支援を担う立場として、防衛力の抜本的強化に寄与するためには、各種装備品の可動率の向上を図ることが喫緊の課題であると認識しております。昨今の通信電子に係る装備品は、新規装備品の導入完了までの長期化や後継機種への導入遅延等により老朽化が進行している現状であり、更には少量多種生産や装備品の高度化・複雑化により調達単価及び維持整備経費が増加傾向にあるため、調達数量等の減少により部品等の製造中止あるいは企業の防衛事業からの撤退も生起しており、可動率を維持するうえで大きな影響を及ぼしています。

このような状況に対応するため補給統制本部通信電子部は、防衛力整備計画に記載されている「防衛装備品の高度化・複雑化に対応しつつリードタイムを考慮した部品費と修理費の確保により、部品不足による非可動を解消し、二〇二七年度(令和九年度)までに装備品の可動数を最大化する。おおむね十年後までに新規装備品分も含め、部品の適

正在庫の確保を維持する。」ことを目標として、「通信電子装備品の高可動率維持施策」を主たる柱として各種取り組みを行っております。修理費が増額され、これまで以上に多くの部品等を購入することが可能となっても、企業側の生産基盤が急激に変化することは難しいことが予想されます。これまで以上に関係企業の皆様と緊密に連携を図り、計画的に調達数量の増加を図っていくことが必要と考えています。また与えられた予算を確実に執行することも重要です。予算が増額しても、執行率が低下あるいは現状維持のままであれば、多くの不用額が発生してしまいます。したがって計画的かつ先行的な調達を実施し、かつ執行管理を適切に行うとともに、関係企業の皆様のご理解とご協力が必要であると考えています。また今年度から、製造中止部品の発生状況や将来の製造中止部品の発生を見積るための調査も開始しており、可動率向上に資する施策を着々と推進させております。

また、将来にわたって通信電子装備品の高可動を維持するためには、調達や補給整備においても新たな施策を検討していくことが必要であると考えています。一例として、耐用年数を大きく経過した後継装備品への更新の遅延が予想される装備品を、現在の技術で再設計・再製造し導入する所謂「近代化改修」や「現々更新」による更新、高可動率の維持を目的として通信電子装備品の補給整備への「PBL(成果保証契約)」の導入、整備完了までの運用をカバーするための装備品単位での「整備用フロート」の保持など、現時点においては実現の可否は不明ですが、システム通信の補給整備の将来の展望として検討する価値のある施策であると考えています。指揮の命脈であるシステム通信と作戦の耳目であるISR(情報収集・警戒監視・偵察)を支える通信電子装備品は、常に高可動を求められていることを認識し、補給統制本部通信電子部は通信科兵站支援の最後の砦として、引き続きシステム通信とISRの運用の現場を支えていく所存です。

システム通信の補給整備における現状と展望について私見を述べさせていただきましたが、まだまだ大小様々な問題を抱えており、その解決に向け取り組んでいく必要があります。これらの問題を解決するためには、諸先輩方のご知見や関連企業の皆様からのご協力が不可欠です。信友会の皆様には引き続き補給統制本部通信電子部に対するご指導、ご鞭撻をお願いいたします。

PBL (Performance Based Logistics)  
ISR (Intelligence, Surveillance and Reconnaissance)

## システム通信・サイバー学校改編の概要

システム通信・サイバー学校 副校長

一等陸佐 井上勝



信友会会員の皆様には平素よりシステム通信・サイバー学校に対するご支援・ご協力を頂き誠にありがとうございます。令和6年3月21日に通信学校は

「システム通信・サイバー学校」に改編するとともに、職種は通信科から「システム通信科」に変更となりました。

また、同3月31日には、防衛大臣、陸上幕僚長、東部方面総監、教育訓練研究本部長、陸幕C4I部長、また部外からは小泉衆議院議員、横須賀市長をはじめ多数の来賓のご出席のもと、システム通信・サイバー学校の改編行事を執り行いました。改編行事にあたっては、新校章の序幕式、報道公開を行うとともに、ご参加いただいた方々との会食も実施いたしました。行事の様子は、NHKをはじめ複数のマスコミで取り上げられる等、世間の関心の高さをひしひしと感じました。

さて、システム通信・サイバー学校となって最も大きく変化したことは、サイバー教育部の新設です。これまで第2教育部で教育していたサイバー及び電算機関連の教育をサイバー教育部に移管するとともに、サイバー教育部の教務課内に企画機能を持たせる等の機能強化を図っています。また、当然のことながら、今後増大していく教育所要に対応するため、サイバー教育に携わる教官の増員も行っています。学校全体としては、第1教育部、第2教育部、サイバー教育部の3つの教育部を有する単一職種の学校としては充実した編制となりました。加えて、研究部にはサイバーにかかわる専門の研究員を増員する等の機能強化を図っています。更にこれら組織の改編に加え、当然のことですが教育の充実に取り組んでいます。昨年度後半期から、更なるサイバー要員の養成拡大に対応すべく、サイバー人材育成のための新たな教育を開始していますが、これらの教育には、陸上自衛官のみならず、海上自衛官や航空自衛官、技官、事務官等も参加し教育を受けています。これらの教育に当たっては、

民間企業等による講師派遣や実習環境の構築、部外施設(YRP)の利用、教育内容の継続的な見直し等、より充実した教育が実施できるよう努力しています。

以上のように、我々学校職員は前述した3月末の改編行事を一つの節目としてこれまで様々なことに取り組んで参りましたが、これで終わりではありません。むしろ、改編行事は、システム通信・サイバー学校の新たな始まりだと認識しています。今後、防衛力整備計画に示されているように、サイバー関連部隊のみならず、電磁波関連部隊の大幅な増勢が予定されていますので、そのための教育内容の充実、教育所要への対応が必要です。そのため、陸幕をはじめ関係機関と連携しつつ、教育課程の新設や教育内容の充実等、先行的に検討を進めています。また、令和9年度末には、現在の本部庁舎に代わり新庁舎が建設される予定であり、そのための準備も現在進めているところです。加えてより効果的に教育を実施する上で、部内外の様々な機関と連携することも重要と認識しています。幸い、この横須賀の地には、システム通信・サイバー学校の他、防衛大学校や高等工科大学といった人材育成に係る組織が存在しており、これら機関との連携をこれまで以上に深化させるとともに、防衛研究所や他自衛隊との連携等も進めています。また、民間の主催する各種教育プログラムへの教官の研修、昨年発足したサイバー人材育成基盤協会との定期的な勉強会の実施等、民間が有する様々な知見を吸収し、学校教育に反映させています。

長引くウクライナ戦争から得られた様々な教訓や近年加速しているサイバー攻撃への対処、Chait GPTに代表されるAIの急速な進化等、我々を取り巻く急激な変化に対し、迅速に対応していく必要があります。今後、システム通信科は、戦闘支援職種ではなく、第一線を担う職種としての自覚を堅持して、果たすべき役割に誠実に対応することが肝要です。我々システム通信・サイバー学校職員一同は、奈良岡学校長を核心として、使命を自覚し、職務に邁進していく所存です。引き続き信友会の会員の皆様からのご支援・ご協力を頂ければ幸いです。



## 「陸上自衛隊通信電子等の現況」

### 陸幕通信電子課総括班

#### 一 はじめに

(一) インド太平洋地域における安全保障環境として、わが国は戦後最も厳しく複雑な安全保障環境に直面しており、力による一方的な現状変更やその試みにより新たな危機の時代に突入しております。また、領域をめぐるグレーゾーン事態等が恒常的に生じ、軍事的な手段と非軍事的な手段を組み合わせたハイブリッド戦が更に洗練された形で実施される可能性にあります。このような安全保障環境を踏まえ、防衛省・自衛隊においては宇宙・サイバー・電磁波領域を含む全ての領域における能力を有機的に融合し、平時から有事までのあらゆる段階における柔軟かつ戦略的な活動の常時継続的な実施を可能とする多次元統合防衛力を抜本的に強化するため、スタン

ド・オフ防衛能力、統合防空ミサイル防衛能力、無人アセット防衛能力、領域横断作戦能力、指揮統制・情報関連機能等7つの重視する主要事業分野に基づき防衛力整備を推進しております。

(二) 整備計画期間内の防衛力抜本的強化実現に向け、令和6年度においては平素から有事まであらゆる段階においてシームレスに領域横断作戦を実現できる体制を構築するための統合作戦司令部を創設するとともに、スタンド・オフ防衛能力等の防衛力の抜本的強化の7つの分野について、引き続き推進しております。

#### 二 システム通信等に関する状況及び主要通信電子器材等の整備

(一) 多次元統合防衛力の実現においては、迅速・確実な指揮統制を行うため、抗たん性のある通信、システム・ネットワーク及びデータ基盤を構築し、各種能力を統合的に運用するため、リアルタイムに指揮統制を行う態勢が必要であり、ネットワークの抗たん性を強化しつつ、人工知能(AI)等を活用した意思決定の迅速化に取り組んでいます。

(二) ネットワークに関しては、「きらめき3号」の打上げによるXバンド防衛通信衛星の3機体制を踏まえた「きらめき」と通信可能な装備品等を整備してお

りますが、陸上自衛隊においても、衛星幹線通信システムの整備を実施して「きらめき3号」運用開始に向けた体制整備を推進しております。また、更なるネットワークの抗たん性強化のため、低軌道通信衛星コンステレーションサービス利用の実証などを実施しております。

(三) 情報システムに関しては、将来指揮統制システムの研究開発及び陸自情報支援システムの整備等を実施して指揮統制・情報関連機能の強化を推進しております。また、情報システムの防護においては、一過性の「リスク排除」から継続的な「リスク管理」へ考え方を転換し、情報システムの運用開始後も常時継続的にリスクを分析・評価し、必要なセキュリティ対策を実施するためのリスク管理枠組み(RMF)の導入等によりサイバー領域における更なる能力強化を推進しております。

(四) 電磁波領域に関しては、電磁波領域における優勢の確保は喫緊の課題として、通信・レーダー妨害能力、電子防護能力、電子戦支援能力、小型無人機等への対処及び電磁波管理機能の強化等に取り組んでおります。陸上自衛隊においては、ネットワーク電子戦システムに加え、侵攻部隊の早期警戒管制機のレーダー等に対して、高出力の妨害実施により、当該空域における状況把握能力を無効化するための対空電子戦装置等の整備を推進しております。



対空電子戦装置(イメージ)

#### 三 おわりに

通信電子課は、主要通信電子器材等の整備に併せて、装備品等の可動率向上及び防衛生産・技術基盤の維持・強化にも積極的に取り組んで参ります。信友会会員各位におかれましては、より一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 第六十回総会・合同歓送迎会

#### 一 全般

令和六年二月二十五日(日)、開催場所をこれまでとは異なる「グランドヒル市ヶ谷」に移し、コロナ禍以来五年ぶりとなる「第六十回総会・合同歓送迎会」を、会員・現役合わせ総数約二百六十名の参加者を得て、盛大に開催いたしました。

#### 二 総会・講演会

「グランドヒル市ヶ谷・珊瑚」において、総会を実施し、会則の変更・会長交代等の承認を得ました。その後、講演会として弥頭陸幕通信電子課長より、「GROUND VISION 2035」と題した講演をいただき、陸幕の将来構想等について、ご紹介いただくことができました。



河本新会長挨拶



陸幕通信電子課長による講演



総会参加会員の状況



共催者ご挨拶



合同歓送迎会会場の状況



信友会新入会者紹介



信友会新旧会長・副会長他現役主要メンバー(陸幕通信電子課長、システム通信・サイバー学校長、システム通信団長)

#### 三 合同歓送迎会

五年ぶりの合同歓送迎会は、趣旨を「現職とOBとの交流の場」とし、内容としては、従来の内容を踏襲しつつ、「グランドヒル市ヶ谷・珊瑚」の大会場にて、会員百十五名、現役は百四十二名、計二百五十七名の多数の参加者を得て、従来にもまして、ゆとりある空間、落ち着いた雰囲気の下、盛大かつ上品で楽しく有意義な時間とすることができました。

## 地区懇親会

令和六年二月十七日(土)、北部方面システム通信群創立六十三周年記念行事に併せ、プレミアホテルTSUBAKI札幌において、五年ぶりの開催となる北部方面地区懇親会が行われました。



北部方面地区懇親会の状況



北部方面地区懇親会の状況(プレミアホテルTSUBAKI札幌)

面システム通信群祝賀会食に参加し、会員相互の親睦を図ることができました。

### 第61回総会・合同歓送迎会(令和7年開催予定)について

●実施時期：令和7年2月24日(月・振替)

・受付 10:30～  
・講演会 11:00～11:25  
・総会 11:30～11:50  
・合同歓送迎会 12:00～14:00

●実施場所：グランドヒル市ヶ谷3階(講演会・総会 珊瑚の間、合同歓送迎会 瑠璃の間)

●会費：¥9,000

●ご出欠：本機関紙送付時に同封の返信はがきにて、ご回答をお願い致します。



## 会員だより

### 東日本大震災を振り返って

会員 林 一也



人生70年を迎えました。若い頃70歳という年齢は想像ができず漫然と人格的にも完成された人間という概念でしたが、いざ自分がその年になってみますと完成された人格どころか、段々と意固地で偏狭な人間になっているような気がします。報道にある日本社会の不祥事を見るにつけ、日本人はかくも劣化したかという気持ちですが、陸上自衛隊にあっては我が国最大、最強の武装集団として厳然と存在し続けて頂きたいと思います。さて老人の戯言はこれ位にして、信友会長の許しを得て古希を迎えた近況ではなく、現役時の大きな記憶となっている『東日本大震災』について記述したいと思います。

当時私は第9師団長の職にあり、当初の感覚では揺れは大きいものの、そのような被害は予想できなかったというのが正直な感想です。じ後、情報が少ない中、青森県から岩手県にかけての太平洋沿岸部の被害が甚大と判断し、部隊に現場進出を命じました。各部隊は3月11日夜から12日未明にかけて自隊で道路を啓開しつつ何とか現場に進出、被災地の自治体との連携を確保し、その後7月26日までの137日間にわたる災害派遣活動が開始となりました。派遣活動の内容は人命救助、遺体の搜索・収容、避難所の運営支援(給食、給水、入浴)、物資の輸送等であり、皆さんご案内の内容ですので省きます。

この間特に師団長として意を用いたことは2つ程あり、1つ目は隊区担当部隊として派遣活動を通じて将来にわたり地域住民の信頼を確保し続けること、2つ目は隊員、隊員家族の安全を確保することでした。1つ目については、派遣活動の全てにおいて後ろ指を指されることの無いよう高い士気のもと厳正な規律を保持し続けることが必要であり、各部隊長には『今回の派遣は実弾を撃たない実戦である』との意識を堅持し、派遣に関して将来歴史の法定に立つことがあれば、『9師団はこのように活動しました』と堂々と胸を張って言えるような活動をしように指示しました。2つめは、隊員の立場にしてみれば、11日に普段通りに出勤し、そのまま災害派遣活動に投入されたわけです。隊員個々には日々の常備薬を携行していなかったり、留守家族に大きな不安を抱えている者も居たと思います。よって、各部隊長には努めて早期に各隊員を交代で帰隊させ所要の処置をするように命じました。それでも今回の派遣間病気で一人の隊員を失いました。日頃飲んでいる薬の確実な服用は医務官を通じて確認していましたが、薬の質と量が活動の内容に対応できているかの確認は不十分だったと思います。普段は事務室で勤務している隊員も遺体収容などに従事しましたが、そのような活動内容が普段服用している薬の効用限度を超えたのではと反省する次第です。紙面の都合で表面的な内容になったことは否めませんが何らかのご参考になれば幸甚です。

### 近況報告「自衛隊定年退職そして還暦を迎え」

会員 長谷川 信一



平成30年に陸自を定年退職し、令和4年に還暦を迎えました。この時期は私と家族にとって、とても大きな変化の時期でありました。

定年後、防衛関連の企業に就職し、新入社員としてはじめて自衛隊以外の仕事に就きました。

還暦を機に全く異なる業種に転職し、当初は不安がありましたが、職場には自衛隊出身者が多く、暖かく迎えてもらい、現在は勤務の内外を問わず同僚と仲良く楽しく勤務しています。

現役時代から定年後の再就職、現在の職場へと環境は大きく変わりましたが、自衛隊で培ったお互いへの信頼、団結力を礎に業務も自衛隊流で円滑に遂行できています。

私は、定年を機にテニスを始め、地域のシニアサークルの先輩方や職場の同僚と週末のテニスを通じて健康維持に努めています。

定年前の同居家族は、長女が既に就職し、次女は進学準備、長男が学生と5人家族が同居していましたが、定年を機に次女がフランスで暮らすようになり、そして長男が就職し、それぞれが巣立っていきました。同居家族が減る中、愛犬を家族に迎え3人と愛犬1匹の同居家族となりました。

妻は、ピアノを習い始め、大好きな薔薇を育てガーデニングに夢中になっています。家の前を通るお花好きの方の激励をうけて元気を貰っているようです。長女は、妻を連れて次女のところ遊びに行ったり、女子旅を楽しんでいます。時々、私も仲間に加えてもらいます。家族、愛犬と共に行くキャンプも楽しみの一つです。



また、この大切な時期に周りの方々から、家族全員にとってもよい刺激をいただきました。それは、子供たちがお世話になった英会話教室のイギリス人のお爺ちゃん先生家族とお付き合いや次女がフランスの友人と帰省したり、そして私自身が長期の海外出張という機会を通じて、新たな出会いや異なる文化を感じることができたことです。家族にとってこの様な新たな気づきを得たことは、とても貴重な経験となっています。

定年退職、還暦とあつという間でしたが、家族一人一人が一步を踏み出す大事な時期に、周りの方々、そして自衛隊時代の同僚の皆様に支えて頂き現在の、日々が楽しく過ごせていることに本当に感謝しています。

還暦を迎え「耳順」に加え新たな気づきを求めて元気に過ごせるよう精進していきたいと思います。

信友会会員の皆様そして現役自衛官の皆様、御健康で益々御活躍されますことをお祈りし、近況報告とさせていただきます。

### 近況報告「人事部担当部長(リクルーター)として」

会員 高橋 孝介



令和5年12月、中央野外交信群長を最後に退官した高橋です。在職間は上司・先輩、同期・同僚、部隊の皆様のご指導・ご支援・ご協力いただいたこと、部隊長に補職していただいたこと、そして無事に退官できたことに改めて感謝申し上げます。

令和6年1月、日鉄環境エネルギーソリューション株式会社(以下、「NSES」といいます)に入社いたしました。NSESは環境・エネルギー施設の操業・整備・維持管理を行う会社で、その主たる業務の一つとして自治体が保有する一般廃棄物(家庭から出るごみ)処理施設の運営があり、現在、全国で約50か所の廃棄物処理施設(事業所)の運営を受託しています。私は北九州市にある本社の人事部(単身赴任で奮闘中です)で、これらの事業所で勤務する退職自衛官の募集・採用に係る業務を担当しています。

NSESは、退職自衛官を「採用の柱」の一つとして位置付けています。私の仕事の対象となるのは陸・海・空自衛官で、活動の地域的範囲も全国ですので、「全国を飛び回っている」状況であり、充実感のある仕事で「新鮮な」日々を過ごしています。

私はNSES本社に採用された陸上自衛官OB第一号ですので、本社内の社員の陸上自衛官に対するイメージの基準は自分になるのだろうと考えており、この会社を紹介していただいた陸幕援護班に感謝しつつ、また、陸上自衛官のイメージを損なうことがないよう心掛けながら、「必ず達成しなければならない目標」を達成すべく頑張ります(達成すべき目標とは何かは触れずにおきます)。また、北九州は歴史的・文化的に面白味のある地域で興味深いものがあり、海の幸にも恵まれていますので、土日等の休日にも有意義に過ごしてしっかりと充電することにも努めたいと思っています。

ところで、現在の仕事での経験から再就職に感じて感じることは、「健康管理」と「援護組織の活用」の重要性です。これまで何度か退職予定自衛官の採用試験に参加しました。その中で、「ぜひ採用したい」と皆が感じた応募者がいたのですが、残念ながら健康上の問題が明らかになり採用に至りませんでした。健康管理は即効的ではなく平素からの積み重ねですので、ご自身だけではなく、隊員(退職予定隊員には再就職も念頭にした)の指導もしていただければ、と思います。そして援護組織と密に連携することで残念な結果とならないようにすることができると思っています。また、援護組織を活用することで「賃金に飛びついて就職した先はブラック企業だった」という不幸も回避することができます。

先述したとおり、私の守備範囲は全国ですので、現職の皆様や信友会会員の皆様のお近くに出没し、ご挨拶に伺うこともあると思いますが、「あれ、なんで高橋がここにいるんだ?」とか「何しに来た」等と言わずお付き合いください。よう、よろしくお願いいたします。



事務局だより

一 全般

令和六年二月二十五日(日)、開催場所をこれまでとは異なる「グランドヒル市ヶ谷」に移し、コロナ禍以来五年ぶりとなる「第六十回総会・合同歓送迎会」を、会員・現役合わせ総数約二百六十名の参加者を得て、盛大に開催いたしました。

二 信友会会員増加施策

信友会会員の減少傾向に係る問題認識から、平成二十九年より、信友会会員増加施策として、システム通信・サイバー学校入校中の幹部課程学生に対する会長講話、BOC・SLC課程教育終了時の優秀学生への会長表彰等を行っています。



SLC優秀学生に対する会長表彰



BOC学生に対する会長講話

三 信友会メール及び信友会HP

信友会のトピックス、慶弔等に係る情報をタイムリーにお伝えできるよう、信友会事務局から随時にメール配信を行っています。また、信友会のホームページ(HP)では、最新の記事はもとより、機関誌等のバックナンバーもご覧になれます。是非、お試しください。

HPの閲覧にはID(メールアドレス)を登録し、パスワードの入力が必要です。信友会HP(<https://信友会.jp/>)

メール配信及びHPの閲覧は、複数のアドレスに対応していますので、メールアドレスの新規登録・変更・追加等については信友会事務局([shinyukai@tune.ocn.ne.jp](mailto:shinyukai@tune.ocn.ne.jp))までメールにてご連絡ください。

四 信友会役員紹介(★印 新任)

- 〔会長〕河本宏章(★)
- 〔副会長〕堀江祐一(★)
- 〔総務〕長..長尾典忠
- 川口晃史 小松広志 山口賢二(★)
- 島山浩明 森 龍雄 和泉賢一(兼)
- 〔機関紙〕長..田川信好
- 矢野裕久 大西準一
- 〔名簿〕長..丹間章人
- 堤浩一郎 安楽正則
- 〔会計〕長..亀澤秀樹
- 和泉賢一(★)
- 〔監事〕長..秋山賢司
- 中村靖彦

五「会則の一部改正」について

本年2月25日(日)に開催した「第60回総会」において「会則」の一部を、以下に示すとおり改正することを議決いたしましたので御案内致します。

- 「第3章 会員 第4条」に、「3項」として、以下に示す内容を追加
- 以下に該当する場合、当該会員は退会したものとみなす。

- (1) 第14条2項に規定する通信等事務費の未納期間が4年以上継続し、且つ役員会からの納入の要請にも応じられない場合
- (2) 住所等不明の期間が4年以上継続した場合

- 「第6章 会計 第14条」中の「2項 通信等事務費」にて、以下の内容を追加
- 指定する期限までに納入がない場合、次回徴収時には、当該未納期間を含めた金額を徴収する。

細部は「会員HP」を参照願います。

六 掲載記事について

掲載記事の内容と執筆者の職名等は、令和六年十一月一日現在のものです。

信友会新入会員

(R5.12.6~R6.11.1)

氏名	最終所属	入会年月日	現住所
高野 匡且	航校宇都宮分校	R06.02.27	栃木県
一戸 信逸	中基シス通	R06.03.04	神奈川県
村田 猛	中基シス通	R06.03.29	神奈川県
上野 一人	中野通群	R06.04.01	神奈川県
堀村 幸由	シ通・サイバー校	R06.04.19	神奈川県
石本 勝彦	シ通・サイバー校	R06.05.10	東京都
石津 正明	中方シス通群	R06.06.07	広島県
山口 賢二	東方シス通群	R06.06.09	埼玉県
本多 崇	中方シス通群	R06.06.13	兵庫県
高橋 進一	3陸曹教	R06.07.27	静岡県
田上 昌徳	8通信大	R06.08.01	熊本県
飯塚 友嗣	シ通団本部	R06.08.09	東京都
幸田 壮生	高射校	R06.08.11	北海道
山下陽一郎	西方シス通群	R06.09.20	熊本県

令和5年度信友会会計報告

(R5.1.1~R5.12.31) (単位:円)

収 入		支 出	
前年繰越	1,636,129	慶弔費	77,266
入会費	290,000	郵送等事務費	53,017
通信等事務費	194,000	印刷費	498,813
利子等	9	原稿料	18,336
寄付等		地方交付金	0
		手数料等	5,810
		次年度繰越	1,466,896
計	2,120,138	計	2,120,138

以上のとおり報告します。

信友会会計幹事

監査の結果、異常ありません。

信友会監事

令和5年12月31日

岩口 利明

亀澤 秀樹

令和5年12月31日

秋山 賢司

上西 慶明

令和6年叙勲おめでとうございます

春

瑞宝小綬賞 佐野 一彦 元通信団副団長

瑞宝小綬賞 長尾 民穂 元西部方面総監部監察官

瑞宝双光章 瀬戸口博昭 元第3通信大隊

秋

瑞宝小綬賞 中村 憲一 元九州補給処長

瑞宝双光章 奥山 盛 元第5高射特科群

瑞宝双光章 高山 正広 元東部方面通信群

【編集後記】

信友会も発足から61年、機関紙も48号となりました。すごい歴史だなく!!正直な所感です。この間、会の発展に尽力された諸先輩の皆様から敬意を表します。

さて、48号のトピックスは、何と言っても、5年ぶりに開催された総会及び合同歓送迎会です。フレイム越しとなりますが、懐かしい方の笑顔をお届け出来ればと思います。編集致しました。

そして、我ら心の故郷、「通信学校」の「システム通信・サイバー学校」への改編です。副校長井上様に、その概要等を一步踏み込んだところで、特別に寄稿頂きました。「新庁舎の建設」、駐屯地の様変わりも、今から楽しみです。

また、お三方の会員に、それぞれの思いや近況などを自由に投稿頂きました。林元9師団長の回顧録をはじめ、大変興味深い内容となっておりま。執筆依頼にあたり、ご多忙にも関わらず快諾いただいた皆様には、信友会役員一同心より御礼申し上げます。

現在、機関紙「信友」のあり方について、検討しているところではありますが、昔ながらの紙ベースによる機関紙が、デジタルにはない、「味のある」ものと実感した事を付言し、編集後記とします。引き続き、信友会をよろしく願ひ致します。